米欧回覧

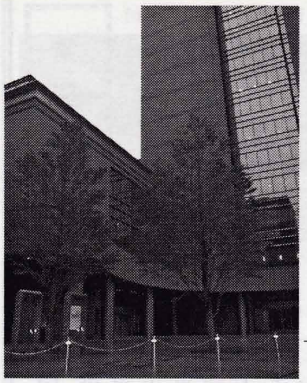
第23号
編集・発行
米欧回覧の会
事務局

二十一回例会、学術総合センターで開催！

国際シンポジウム、いよいよ具体化へ

二十一回の例会は、四月二十五日、午後一時から神田一ツ橋の学術総合センターで開催された。国際交流基金と東芝国際交流財団からの資金援助が決まり、国際シンポジウムはいよいよ実施段階へ準備を進めることになった。参会者一部が四十五名、二部が三十八名と少なかったが、シンポジウム会場の下見という意味でも非常に有意義であり、実行委員会の組織についても熱心な討議がなされた。

本会場は、学士会館の斜め前、如水会館に隣接する新築の二十二階建ての高層ビルであり、今回はその二階にある一ツ橋記念講堂で一部の総会、中会議室で二部の国際シンポジウムに関する討議が行われた。



学術総合センター外観

その結果、明らかになったことは、この会場は大小さまざまな会議室を備えており、それぞれに近代的な最新の設備が装備されているが、そのオペレイションはすべて借主が操作するのがタテマエになっており、飲食などのサービス面についてもあまり期待できないということである。

それはこれが公共的な施設であり使用料が非常に低廉であることにも関連しており、映像、音響その他、機械設備の操作についても当会のメンバーの責任において行う必要があることである。

それはボランティア団体としての当会の催し、しかもアカデミックな催事に極めてふさわしい会場ともいえるが、そのためにはそれなりの準備と会員を挙げての協力が必要であることが認識された。

例会二部は中会議室で討議
（学術総合センター）

そして出席者全員にアンケート用紙が配られ、回収された。

主な項目は左記のとおり。

一・自分の担当したい役割・分担

二・協力できるタイミング（会期中、会期前、他）

三・参加したいセミナー、希望のテーマ

四・運営についての意見

五・会費、運営費などについての意見

そして同アンケートは会員全員に配布し、協力を呼びかけることになった。

なお、国際シンポジウムの内容、スケジュール、担当などについての概要は次ページに掲載する。

小泉新風と平成維新

泉　三郎

日本列島に新しい風が吹き抜けている。

この四月、ライオンヘアーをなびかせて、サムライ小泉の雄叫びが日本列島に鳴り響いた。それから、僅か五十日もたっていない。が、その間にあれよあれよと言うほどに「変革の風」が日本列島に吹き始めた。派閥人事を排した自民党の三役人事、政策新人類や女性五人を含む清新な内閣の誕生・そして初舞台の国会でも新首相は歯切れよく、自分の言葉で信念をもって熱く国民に語りかけた。その結果、「小泉は本気だ、命を懸けている」というイメージが浸透して、世論は八十％を越える支持率を示した。細川内閣の誕生以来の高率、いや、それも越える空前の支持が集まった。

危機意識は国民の方が進んでいたのだ。痛みを伴う手術をすべきなのに、それをやらない膏薬張りばかりの政治に業を煮やしていたのだ。旧体質の既得権益集団の延命策とただそれに反対ばかり唱え確かな代案を示し得ない野党にやきもきしていたのだ。そこに、国民の期待を代弁する有言実行のサムライ、本物の政治家が出てきたことに期待したからだろう。

しかし、与党も野党もマスコミもお手並み拝見とまだまだ様子を見ていた。ところが、謳い文句の「聖域なき構造改革」は次々と具体的な形を現し始めた。特定財源の道路税や特殊法人へのメス、そして誰をもアッと言わせたハンセン病訴訟事件・これは実に鮮やかだった、ヒューマニズムが法を覆したというべきか、この超法規的英断は日本列島津津浦々の人々に感動の涙を浮かばせた。

そこには民意を的確に読みとって、それを明快に表現し、したたかに実現していく勇気がある、断行力がある。東京都知事に石原慎太郎が登場したように、いま国政に真の政治家が登場した思いがする。むろん真価が問われるのはこれからだが、幕末に例をとれば、高杉晋作のように捨て石になるのか、勝海舟のような形で旧体制の破壊者になるのか、あるいは木戸孝允や大久保利通のように、維新を成し遂げて新政府の樹立までこぎつけるのか。いずれにしろ国民がどこまで痛みを伴う改革を支持し続けうるかに、国運がかかっているように思われる。

第二十一回例会報告

国際シンポジウムの概要

＊内容およびスケジュール

十一月二十二日
岩倉使節団派遣百三十年記念祝賀パーティ
日本プレスセンター
（シンポジウムの歓迎レセプションも兼ねる）

二十三日
研究者セミナー
会員サロン
学術総合センター会議室

二十四日
研究者セミナー
学術総合センター会議室
マラソン上映会
一ツ橋記念講堂

二十五日
公開シンポジウム
一ツ橋記念講堂

＊参加が決定している方

・海外
マーチン・コルカット教授（プリンストン大学）
ペーター・パンツアー教授（ボン大学）
フレッド・ノートヘルファー教授（カルフォルニア大学LA校）
錢　国紅助教授（大妻女子大学）

・国内
岩倉具忠教授（京都外語大学）
岩倉翔子教授（就実女子大学）
西川長夫教授（立命館大学）
高田誠二名誉教授（北海道大学）
川勝平太教授（国際日本文化センター）
山崎渾子教授（聖心女子大学）
古田島洋介助教授（明星大学）
芳賀徹教授（京都造形芸術大学）
（尚、参加者はこの他に数名折衝中）

米欧回覧の会・収支報告

2000.4～2001.3

収入		支出	
◎前年度よりの繰越	1,087,320	◎例会および映像の会関連費用	2,233,077
◎今年度の収入	2,981,269	案内郵便代	180,750
年会費	679,000	会場費	594,723
賛助会費	0	講師お礼・車代	240,000
特別賛助会費	320,000	食事・飲物等	1,217,604
例会および映像の会会費	1,981,500	◎NEWS関連費用	347,600
貯金利子	769	19～22号印刷代	204,530
		送付郵便代	143,070
		◎諸経費	831,114
		電話・通信費	206,794
		会場費他	451,089
		雑費	173,231
		◎次年度繰越金	656,798
	4,068,589		4,068,589

3月末会員数　202名

歴史部会の現況

連絡 半沢健市
Tel/Fax:03-3717-5576
khanzawa@dh.catv.ne.jp

歴史部会報告

（四月二十六日）
「山田耕筰・光と影」をテーマとした音楽評論家丘山万里子氏のスピーチの概要を報告する。

丘山万里子氏

★時代と芸術家

時代と自分が向き合ったときに芸術家には何ができるのか。それがきょうのテーマである。その時代とは「日本の近代」で、日本の近代は「欧化」と「天皇制」の二つを柱とした。私は今回、山田耕筰を通して近代を見ようと思う。

耕筰は一九一〇年から三年間ベルリンに留学する。山田には「国家は鬱陶しい」存在だったが、ベルリンでの勉学のなかで、西洋音楽の「荒地」である日本で自分が何ができるのかを考えた。

★楽劇と歌曲への傾倒

帰国後の耕筰が取り組んだのは音楽と劇（文学）の合体である国民楽劇だった。この時期は大正デモクラシーという時代の空気のなかで山田耕筰にとっても最も幸福で光輝いた時期といえる。

★「新しき土」と大満州国

一九三七年の日独合作映画「新しき土」の上映のための渡独時にヒトラーに会って感激し反ユダヤ政策に賛成している。

満州国国歌は三種類あるが第一作は「大満州国国歌」と題されテイ・コウショウ詩で一九三二年に山田自身が作曲、第三作にも関係している。

★戦争責任の問題

終戦直後には、音楽評論家山根銀二と山田耕筰の戦犯論争が起きている。

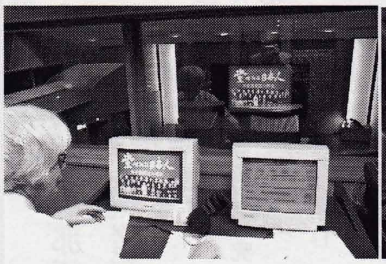
山根の批判に対して山田は「なるほど私は戦争に協力した。しかし愛国的行動が戦争犯罪なら全国民が戦争犯罪人になる。戦時中の音楽家の行動は山根らが主導権をとったのだ。私などは置物だったに過ぎない。」と答えた。戦争になると人間は軍事一本に塗りつぶされる。その精神の変遷を私は山田耕筰の中に見た。

大事なことは今日の様々な政治上の動きについても、一人一人が責任をもって、自分のこととして真剣に考えなければならないということだ。いま私たちはどこにいるのか。山田耕筰の今日的意義を問うのはそれを問うことなのである。

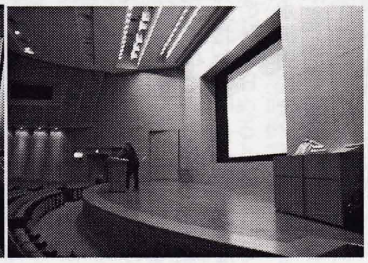
山田耕筰

＊実行委員会（担当幹事）
レセプション（藤原、田川、塚本）
セミナー＆シンポジウム（水沢、半澤、柳沢）
映像サロン（足立、岩崎、長谷川）
通訳・アテンド（郡山、多田、浜地）
会場設営（浅沼、小田仁）
広報・PR（石川、尾崎）
記録（中山、正木）
総務・企画（泉、山田、坂田）

国際シンポジウムが行われる学術総合センター・一ツ橋記念講堂



調整室からスクリーンに投影



ステージ

米欧回覧の会・2000年度・活動報告

	全体例会	読む会	歴史	現未来	国際交流	映像・インターネット	関西支部
2000年 4月	17回例会（西川長夫教授）	宗教（小林、藤原、小山）	福沢文明論（1）	現未来提言論（編集会議）	例会懇親会	ホームページ立ち上げ	
5月		軍事（正木、水沢）				19号ニュース編集	米国編前半
6月		産業革命（原、長谷川）	福沢文明論（2）				
7月	18回例会（寺島実郎氏）	教育（小菅、片上）	例会担当		例会懇親会		
8月		ー休みー				国会議員上映会 20号ニュース編集	米国編後半
9月		米国（水沢、合田）	福沢文明論（西部氏）	提言試論	独逸回覧ツアー		
10月	19回例会「日本をどうする？」	パリ（松井、阿部）		例会担当			
11月		ローマ・ベルギー（磯野、川島）				21号ニュース編集	英国編前半
12月		音楽（岩崎）				マラソン上映会	
2001年 1月	20回例会「新年懇親例会」テーマ：英国	ロシヤ（山田、坂内）	伊藤博文（石川）		新年例会担当		
2月		ウィーン万博（宮野、小林）					英国編後半
3月		「米国編」朗読会		日本の政治		22号ニュース編集	

関西支部

連絡 山崎岳麿
TEL/FAX 06-6853-3137

五月二十五日、阪急グランドビルの関西文化サロンで午前十一時半から開催。参加者は十名。

山崎より「米欧回覧の会二〇〇一プロジェクト」、又その一環としての京都での映像の会の計画等について説明、「久米邦武文書・第三巻・岩倉使節団関係」の紹介。

朴居さんから大使一行は欧米から色々の文物知識を受けたが、こちらから与えたものもあるとの話をされた。それは英国側の要請で鉄眼禅師の一切経を英国へ持ち込んだかしており、当時英国に留学していた南条文雄という人がこれの英語、サンスクリット語、漢語による目録を作った。この目録は欧州での仏教研究に大いに役立ったとの事である。

後は例によって「米欧回覧実記」、フランスの概説、パリ編の一部を皆で読む。フランス製品の華麗新奇、パリは文明の中枢、流行の利権を取っていること、今なおシャネルだ、ルイヴィトンだと流行るのを見ると百三十年たっても変わらないのをどう考えるべきか。長くパリに住みフランスをよく知る西川先生は、久米邦武はフランスに入れこみすぎとの話。

次にパリの第一印象から凱旋門、シャンゼリゼー、コンコルド、チロリー宮、ルーブルと今も変わらぬパリ。

最後に博物館についての久米の意見を読む。古いものを大事にしてこそ文明の光を生ずるのだとの意見。明治政府が早くに博物館を建て、仏像などの保全に務めたのは、こういう知見によるのだろう。

現未来部会の現況

連絡 塚本 弘
Tel:03-3211-2765
Fax:03-3213-1371

三月二十一日（水）十八時三十分より二十一時まで「日本の政治をどう打開するか」について活発な議論をおこなった。その一端を伝えるために乱暴なとりまとめながら、左の四点についての参加者十七人の採決の結果を報告する。

・七月の選挙で日本の政治が変わるか？ イエス 十二人
・日本の政治が悪いのは国民が悪いから イエス 九人
・首相公選制をやるべきである イエス 十人
・森首相のチョコレート問題を予算委員会で討論すべきか ノー 大多数

なお、次回は七月十二日（木）、テーマは「小泉内閣を採点する」、で行います。

盛会だった「那須野が原・歴史ツアー」
明治の元勲諸邸を訪ね、学んだ感動

★水沢周氏多年のご研究の地へ

二〇〇一年五月二十日、二十一日と一泊二日のスケジュールで米欧回覧の会「那須ツアー青木周蔵別邸・松方正義別邸を訪ねる旅」が開催され、三十八名の参加者を得て、実り多い行事となった。この企画は水沢周氏によるもので同氏の多年にわたる青木周蔵研究のおかげによって実現したものである。

水沢周氏はノンフィクション作家として「青木周蔵・日本をプロシャにしたかった男」(中公文庫全三巻)を刊行されており、今回の那須ツアーは氏のレクチャー(往路バス車内、訪問先各邸、各地)を頂きつつ進められた。水沢氏によって準備された配布資料は「那須・貴族農場の旅」(A四版五頁)「那須の河川と大農場／那須開墾社／疎水分量表」(B五版四頁)および「青木周蔵別邸」(栃木県発行カラー刷りA四版パンフレット)「那須地方の地図・地形」など様々なものである。

青木周蔵別邸

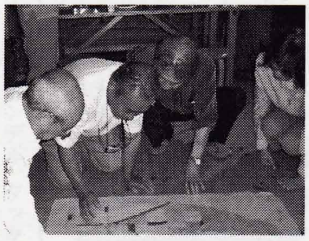
★晴天に恵まれたバスツアー

バスは新宿駅西口を午前八時に出発し、首都高速から東北道を経由して那須インターチェンジに向かうコースをとった。車内では先ず泉三郎氏より那須ツアーの趣旨などについてご挨拶を頂き、その後、水沢周氏より車内レクチャーが開始され、配布資料にもとづいて青木周蔵、松方正義ら明治の元勲について、また、訪問地の那須地方の農場と水利などについて勉強しつつ現地へおもむいた。

★元勲諸邸の見学と松方家のご配慮

青木周蔵別邸を見学した後、周辺の松林の美しい風景にふれながら松方邸に向い、旅装を解いた。松方別邸を宿泊等に利用させて頂くにあたって松方七郎氏より、布団の敷き方、たたみ方、掃除の仕方、整理の仕方などオリエンテーションを頂いた。

松方七郎氏は今回の那須ツアーの事実上のプロデューサーとして、お心配り、ご手配、企画立案や長兄の松方峰雄様へのご連絡や色々なお願いをして下さり、最初から最後まで面倒を見て頂いた。


地図を広げて説明する松方峰雄氏と熱心に聞き入る参加者

★合宿で学ぶ、語る

ご当主、松方峰雄様からは夕食後、松方正義と明治の日本についてご講義を賜った。夜もふけなんとする講義は酒も入って盛り上がり、深夜に及んだ。この後は、それぞれ大部屋、中部屋、小部屋に別れて就寝、旅の疲れと講義講話の興奮のうちにいつしか全員、深い眠りについた。

★朝のすがすがしさとおいしさ

翌朝、早く起床された方々は松方別邸敷地およびその周辺の土地を森林浴をかねながら散歩をした。広く見通しのよい牧草地を歩いたり、疎水を見学したり、公園を散歩したりして、心ゆくまで那須の自然と風物、施設を楽しんだ。

朝の散歩の後、朝食である。柳沢賢一郎氏ご夫妻はじめ参加会員のお手伝いを頂いて楽しいひと時となった。何と、ご当主の松方峰雄様がトーストを焼いて下さったり、それにオムレツまで一人一人にお作り下さったのである。これがお上手で旨くて最高であった。ご当地のミルクやヨーグルト、ジュースなども新鮮でまことにリッチなパワーブレックファーストとなった。

美味しい食事と会話

今回は昼食も夕食もうなぎや中華のグルメツアーであった。

★那須野が原を辞して

朝食後、一同勢揃いして記念写真撮影、バスに乗り込んで松方別邸を辞した。

この第二日には、大山、乃木、山縣の各別邸を訪問、見学した。各別邸に入るや水沢周氏から詳しいご説明を頂き、行く先々で感銘を受けたのである。帰路は各高速道路を順調に走り、東京駅前に午後九時前に到着して無事解散した。

★感動の経験価値を得て

今回の那須ツアーは女性の方々が多く、また、久しぶりに米欧回覧の会の行事に参加された方も少なくなかった。

バスに乗って旅をするというのは文化人類学や民俗学でいうところのフィールドワークであり、学びと感動の両面で実りがあった。最新のマーケティング理論でいわれている"経験価値"を得たともいえる。

ご参加下さった皆様方、松方峰雄様、松方七郎様、その他現地でご指導ご協力下さった皆様方に厚く御礼申し上げる。

担当・国際交流部会
浅沼晴男　記

★松方別邸「万歳閣」余話★

不良債権処理の今むかし

松方家の那須別邸は、通称「万歳閣」と呼ばれる。明治三十七年、当時皇太子だった後の大正天皇がお泊りになっていて、その時、日露戦争での戦勝の報が伝えられ、一同が「万歳！」を唱えた由緒によるものだという。

この重要文化財に指定されても不思議でない建物に、今回、われわれ一行、三十余名が泊めていただいた。それもご当主の松方峰雄氏と七郎氏、そしてその友人・知人達のもてなしによってだった。ご承知の通り別荘の管理はなかなか面倒である。そこへ客人を泊めるとなるとなおさらである。それも三十人もの多数が宿泊するのだから、いよいよ大変である。戸を開け放ち、部屋を掃除し、布団を用意し、風呂の準備も朝食の支度もしなくてはならない。

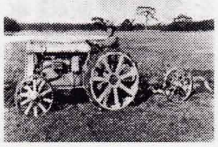
「万歳閣」の前で記念写真

それを敢えて引き受けて下さったのは、やはり「米欧回覧の会」だからであったのではなかろうか。それには松方家そのものが岩倉具視や大久保利通や伊藤博文との因縁が浅からぬこともあろうが、当会のメンバーにご当主や七郎氏のお馴染みが少なくなかったことにもよるのだろう。当会としてはまことに有り難いことで、お陰でわれわれはその歴史的な館で一夜を過ごすことができた。

まず、応接間に招じ入れられて驚いた。そこには明治の元勲・松方正義氏が坐っておられたからだ。等身大の写真ではあるが、威儀を正して我々を迎えて下さったのには思わず身の引き締まる思いがした。そして、その夜、ムササビも住みついているという館で、その正義氏の直孫に当たる松方峰雄氏からお話を伺うことができた。その中から時節柄とくに印象に残ったエピソードを一つご紹介したい。

明治初年、この那須野が原は水利が悪く一面の葦の原だったという。その土地を何とか開拓して生かせないかと考えたのが、欧米を視察してきた松方正義や青木周蔵ら明治の先人達であり、地元の有力者とも語らって開拓を始めたのがこの一帯の歴史だった。そこには禄をはなれた士族の授産の意味もあった。

大蔵大臣在任十四年という財政の大元締めだった松方正義も再三誘われたが、現職にあるうちは敢えて土地を持とうとはしなかった。しかし、地元有力者の開墾が難航する中、明治二十一年、ようやくこれに参画することになる。そして水をひき林産と牧羊を主体に経営を軌道に乗せ最盛期にはその面積は一六五〇町歩に及んだ。この別邸もその時期に建築されたものである。



昭和６年頃の千本松牧場

しかし、その広大な土地も今では大半が他人の手にわたっている。それは昭和二年の大恐慌時に当時の松方家当主だった巌氏が、十五銀行の倒産の責任をとってこの土地もそっくり提供したからだった。十五銀行は明治十年に創立された通称「華族銀行」である。岩倉具視が音頭をとり旧大名や宮廷貴族が富国強兵の国策にのっとりながらその家禄・資産の運用をはかるべく四百数十人がこぞって設立したという。

その経営には紆余曲折があったが、大正四年、頭取に就任したのが松方巌氏で、その在任中には積極拡大路線で業績を伸ばした。ところが退任後五年たった昭和二年、大恐慌に見舞われ、取り付け騒ぎを起こして倒産のやむなきに到る。当時、整理を必要とされた不良債権は一億三千七百万円にも及んだという。その貸出先には松方幸次郎氏の経営する川崎造船所やその他松方一門にまつわる東京瓦斯電気工業などへの融資が大半を占めた。

松方巌氏は既に社長を退いてはいたが、その責任をとって公爵の爵位も返上し私財も投げだしたのだ。書画骨董もふくめてその提供した私財は四千九百万円にも達したという。その背景にはむろん華族株主や債権者達への配慮があったであろう。しかし、その巌氏の潔さに感応して、せめてこの館と周辺の土地だけは除外しようということになったのだと聞く。

翻って平成の巨大倒産劇、数多の経営責任、銀行の責任問題のお粗末さはどうか。「そごう」の水島天皇？の資産隠しに到ってはもうなにをかいわんやである。

昭和恐慌時の不良債権処理の仕方を管見してみると、歴史は繰り返し、いつの時代も同じ様なことがあるものだと思わざるを得ない。しかし、少なくとも当時の経営責任者には私財を投げだすだけの潔さがあった。むろんそれを“当然”とする声もなくはない。しかし“当然”とされることさえなされないのが今日の現実ではないのか。

この松方別邸が意外にも質素であり、そこには管理人もいず、当主みずからTシャツ姿で鍬をふるって芝を植え、フライパンをとって朝食のオムレツをつくり客をもてなされる姿に、薩摩の家系らしい質実剛健の気風をみたのは私だけであろうか。

こうしてわれわれは、爽やかな新緑の風に吹かれながら、明治のサムライマインドに、潔いサムライ魂に思いを馳せたのである。（S・I記）

実記を読む会
4月分報告

体験的「実記」抄
オランダ・ハーグ編

多田 幸子

昨年は日本、オランダ国に国交が開始されて四百年を迎え、両国の皇室を始め、あらゆる分野の人々を巻き込んで多くの行事が盛大に行われました。その長い両国の関係と唯一日本が開国した国であることを考えると、使節団のオランダ逗留および記述は極めて短いのではないかという素朴な疑問も交えて、私がオランダ本社転勤となり一年半を過ごしたDen Haagを中心に実記にそってお話ししたいと存じます。ちなみに私が十一年おりましたオランダの会社は一八七六年、つまり使節団の行った三年後に設立されています。

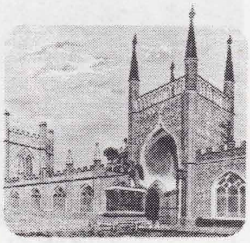
●オランダの歴史

使節団がお目にかかったウイレム三世の父君ウイレム二世は一八四四年徳川幕府に国書を送り開国を勧告しております。ウイレム三世については、モーリス・プロールのオランダ史から抜粋しましたのでご紹介します。在位は一八四九年から一八九〇年の長きに渡り、気質としては自由主義者ではなかったが議会の要請には誠実に呼応し、嫌いだったトルベッケ首相をたて、選挙制度、地方行政、郵便制度などに関して極めて重要な立法上の成果を残しました。

また、アムステルダムを北海に最短距離で結ぶアムステルダム・アイマイデン間の北海運河や、フック・ファン・ホーランドの堤防を貫きかなり大きな船がロッテルダムに入ることを可能にした見事な水路、新水道のような大事業が企てられています。これを、木戸孝允が別行動で建設中のNorth Sea Canalを見に行ったことが彼の日記に書かれています。

●ハーグ

二百三十頁「アンウェルプ駅ヲ発シ、四時四十分二蘭の国境クロセンタウンニ達ス。」これも、オランダの記録によれば「一行はベルギー滞在後Roosendaalに到着」とあります。Roosendaalは今も残るベルギー・オランダ国境の町で、私は昨年も通過しています。このローゼンダールに元日本公使(この時大使はまだ存在していません)フロスブルグ氏、元日本領事官ハンデル、タック氏が出迎えています。オランダの記録によると「使節団をDe Graeff van Polsbroekがオランダ政府を代表してお迎えした。彼は日本に一八五七年から一八七〇年まで日本領事、日本駐在公使であった。同じくL.van der Takも同行して駅に迎えた。」タック氏は横浜の商工会議所の頭取で一時横浜の駐在公使をしたこともある。タック氏は一行がオランダを去るまで終始、使節団の共をしたが、それは自分の意思でエスコート役を買って出たものであり無償の行為であった。」彼は自宅での供応もかってでていますね。二百五十八頁「接伴掛ハンデル、タック氏ノ宅ニ赴ク、夕餞ノ亭アリ」



ハーグの王宮
(「実記」第三巻２３５頁)

●オランダ気質について

私が十一年間オランダの会社に勤めていて、またその後十年近く深いつながりがあったので、オランダ人の嫌なところもいいところも(それはあまりなかったけれど)全部分りましたが、それにしても数日の滞在でこれだけ見ているのはすごいです。

勤勉であること、これは誰しも認めるところ。

国土の四分の一が海面より低いのですからオランダ人は、他の国の国土は神さまがくれたもの、でもオランダの国土は自分たちで作ったのだといいます。無ければ無いなりに作るか、どこからか取ってくるという調子で大変シビアです。私はまだ若かったからあまりの強烈さにへきへきしたところがありますが、今思えば私が甘かったのであって、少し彼らの生き方を肯定できるところもあります。

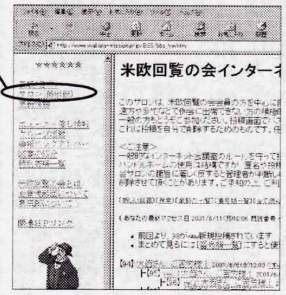
彼らの金銭感覚に使節団もついていけなかったところがあったようで、オランダの記録で面白いことを発見しました。使節団はオランダでは少し待遇に不満のところがあったようです。二百三十二頁「旅館ハ政府ヨリ供シ、食飲ノミヲ使節ニテ弁セシム」私はなぜこんな記述があるのかと思っていましたが、他の国では全部払ってくれたところもあったりして、使節団は少し不満に思ったようです。オランダとしては、当時の各国の大使達に調べさせ、儀典にあった扱いをしたようですが、他国では日本使節が珍しいので過分に扱ったようです。

米欧回覧の会
Iwakura Mission

6月2日からホームページが新しくなりました

ホームページ・リニューアル版は、メニュー（目次）を細かく整理して全体像を分りやすくし、関連する記事相互のリンクも増やしました。

課題だった管理体制も強化され、会員の方々のみならず広く開かれた「会員による手作りメディア」として充実していきたいと思います。皆様方の再度のアクセスとご意見・ご参加をお願いいたします。



●画面左枠の「サロン（掲示板）」をクリックすると皆様の意見や情報が自由に書き込めるサロンのページが開きます。気軽に参加して下さい。

http://www.iwakura-mission.gr.jp

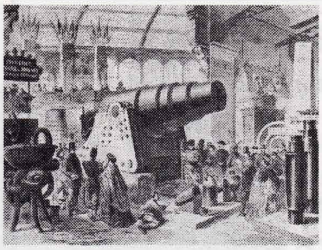
実記を読む会
5月分報告

日本の近代化にとっての プロシャ

水沢 周

アメリカ、イギリス、フランスと、当時の超大国を観察した後にプロシャに入った岩倉使節団は、そこでどのような印象と認識を得たろうか。

プロシャは、ナポレオン戦争以来分裂状態を続けていたドイツ各領域を使節団訪問の直前に統一して、ドイツ連邦は、ある意味でかつての神聖ローマ帝国の後裔である。ローマ帝国の後継者であったカロヴィンガ・フランクは、今のドイツ・フランス・イタリアを境域とする大国があったが、シャルルマーニュの死後、九世紀半ばに三分割された。そのうち東フランクが中心となり、ローマ法王権の保護者の地位も得てエンパイヤを形成したのが神聖ローマであり、この帝国は十九世紀初頭まで存続していた。



1867年パリ万博のクルップ砲
（図説万国博覧会史より）

歴史地図や年表を参照すればすぐ分かるのだが、この神聖ローマ、あるいはドイツは、フランスと並ぶヨーロッパ文化・文明の中核であった。久米は『実記』の中でドイツを「断片を闘縫して、一幅の帛を作れるごとき」國と認識するとともに、歴史的に見て、「ドイツの欧州に関係あることはなはだ緊要」と述べ、ドイツ、プロシャの位置付けを正確にみている。また、ごく近々に行われたドイツの統一の状況は、幕藩体制から中央集権国家に移行した日本と告示しており、その意味でもドイツは、使節団にとって学ぶことが多いと期待された。

世界最大の製鋼・兵器工場であるクルップの視察からドイツ訪問を開始した一行が、ベルリンで見たものは、しかし、英仏などに比べればはるかに素朴で田舎っぽい文化であった。ベルリンはなお新興都市に過ぎず、近代的都市計画もようやくその一部が完成しただけであった。クルップの見学記を除くと、ドイツにおける見学諸記録は、やや詳細さを欠く。これは一行の旅の疲れを物語るものでもあろうが、批判的摂取の姿勢が身についたということかもしれない。

しかし、ドイツ人気質についてはなかなか犀利な分析を行って、日本人の性格との類似を感じ取り、また、欧州最大の政治家ビスマルクや天才的軍略家モルトケの言動を通じて、いわゆるパワーポリティクスの本質と、新興国の国際社会における生き方を印象深く確認している。それは大久保利通や、まもなくその後継者となる伊藤博文の心を強く引き付けたことは確かであり、以後の近代日本の歩み、とくに政治や軍事面において、大きな意味を持つことになった。

さらに当時のドイツ留学生の専門・経歴を見るならば、ドイツが日本の近代化に果たした大きな役割はきわめて明白となる。ここでひとつ興味を引かれるのは、ドイツの農林業についての分析が、当時プロシャ滞在中の青木周蔵が後に作成している『農業意見書』とよく重なり合うことで、『実記』のこの部分には青木の影が感じられる。

『実記』の各国の記述について、それぞれの国に滞在する留学生たちの「影響」を考察することは、今後の『実記』研究の大きな課題ではなかろうか。

岩倉使節の足跡を英国各地に訪ね、ロンドン「岩倉ミッションセミナー」に参加する旅

◆日時
九月六日(木)～十三日(木)
八日六泊

◆旅程
ロンドン
リバプール
エジンバラ
ハイランド

◆コーディネーター
泉三郎氏
藤原宣夫氏

◆旅費
三十二万八千円

◆催行
近畿日本ツーリスト

本年は「英国における日本年」でもあり、当会でも九月十一日、ロンドンのダイワファウンデイションのご協賛によってセミナー「英国における岩倉使節団」を開催することになりました。そこでこれに参加し日英交流の実を挙げると同時に「岩倉使節団の足跡を追って、英国各地を訪ねる旅」を企画しました。なお、九月十日より、同会場では「英国における日本人」の写真展も開催されており、貴重な展示をみることができます。

また、コーディネーターとして泉三郎氏と藤原宣夫氏が全旅程を同行することになっており、当会にふさわしい添乗員なしの手作りの旅になります。

具体的には別紙案内の通りですから、参加希望の方は早めにお申し込み下さい。

（詳細は別紙参照）

セミナー会場のダイワハウス

「米欧回覧の会」ご案内

趣　旨　この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。
この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。

会　員　上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例　会　年に４回くらい全体例会をもちます。

分科会　テーマ別にグループ活動をします。映像サロン・勉強会・旅行会・研究会・シンポジウムなど。

機関紙　年に４回程度機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

幹　事　会員の中から、代表１名、幹事十数名を選び、運営を担当します。

会　費　年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・分科会・講演会などについては、その都度の会費とします。

事務局　当面「イズミ・オフィス」に置きます。

〒192-0063 八王子市元横山町1-14-16
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:0426-46-3310
FAX:0426-45-8700

入会申込

氏名・連絡先(自宅或いは勤務先の住所・TEL・FAX)現職&キャリアを事務局までFAXまたは郵便でお送りください。なお年会費は郵便振込が便利です。
00180-2-580729　米欧回覧の会

「米欧回覧ニュース」のバックナンバーはホームページに掲載されています。また、インターネットサロン(会議室)にも気軽に参加してください。

http://www.iwakura-mission.gr.jp

＜催し案内＞

2001年6月～10月の予定です。

☆第２２回例会

日　時：７月23日(月)　18:30～21:00
場　所：国際文化会館　講堂
講　演：山崎渾子氏(聖心女子大学教授)
「岩倉使節団はキリスト教をどうみたか」
詳細は追ってご案内します。

☆実記を読む会

７月５日（木）18:30～　金本君子氏
「米英編」を中心に「主婦(女性)の目からみた実記」
重箱の隅をほじくるようなコメント集？
９月27日（木）
10月11日（木）
会場はクラウンインターチェンジプログラムスです。

☆歴史部会

日　時：６月30日（土）　13:15～17:30
場　所：国際文化会館D会議室
テーマ：「黒澤明『わが青春に悔いなし』を見る」
報告者：松本正志氏(当会会員・映画監督)
会　費：一人２０００円
(会場費、ビデオデッキ使用料として)
備　考：食事は出ません。会場にレストラン、飲物自動販売機があります。
申　込：幹事半澤まで。
メール　khanzawa@dh.catv.ne.jp
FAX　02-3717-5576

☆現未来部会

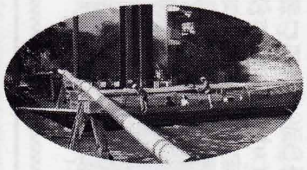
日　時：７月12日（木）　18:30～21:00
場　所：国際文化会館セミナールーム
テーマ：「小泉内閣を採点する」

☆英国ツアー

日　時：９月６日（木）～13日（木）
旅　程：ロンドン、エジンバラ等
コーディネイター：泉三郎氏、藤原宣夫氏
旅　費：328,000円

編集後記

◇九月の英国ツアーや十一月の国際シンポジウムなどの企画がようやく固まりつつあります。それぞれが「手作り」をモットーとしているため、泉さんをはじめ幹事の方々は多忙な日々を過ごしています。このような慌しい状況もあって、前号に続き予定より二十日ほど遅れての発刊となりました。
これから益々忙しくなることは確実ですが、二百人の会員全員に送られる中核メディアとしての重要性は極めて大きいと自覚しています。年四回刊は絶対に守りますので、多少の遅れはお許しください。
◇タイの行政改革をサポートするボランティアの仕事を四月より開始した楠木さんから、時々メールで近況が届きます。タイの役人とのやりとりをはじめ、水上バスの写真も送られてきました。距離の隔たりはコミュニケーションの断絶にならない時代となりました。



(N)